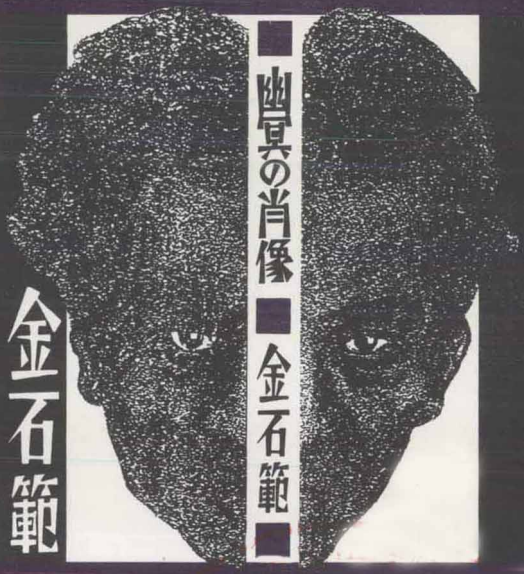
幽冥の肖像

金石範



幽冥の肖像

金石範

■幽冥の肖像■金石範■

幽冥の肖像

金石範

■金石範■

筑摩書房

幽冥の肖像

一九八二年十月十五日　初版第一刷発行

著　者／金　石　範

発行者／布川角左衛門

発行所／株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替東京六―四一二三
郵便番号一〇一―九一

印刷／多田印刷　製本／矢嶋製本

©金石範　一九八二

Printed in Japan　0095-80226-4604

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい．送料小社負担にてお取替えいたします．

目次

幽冥の肖像　5
酔夢の季節　89
乳房のない女　159
結婚式の日　191

装幀　田村義也

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

幽冥の肖像

幽冥の肖像

一

横丁の路地裏から埃っぽいバス通りのひろがりのなかに出ると、真夏のあふれる陽射しが両眼に切り込み、車の排気ガスにあおられた暑気が透明な袋のように全身を包んできた。

私はいま路地の、さらに奥の路地にある一軒の小さな朝鮮食堂から出てきたところであった。眼がちかちかし外気が晒したように白く光るのは、どうやら焼酎一杯の軽い酔いのせいだ。食堂では汗だくになってケージャン（狗汁）を食べてきたのだが、グラス一杯の焼酎の酔いがなお体内で余熱を燃やしていたのである。

ちょうど二十四時間まえのいまごろ、つまり昨日の昼すぎ、私は、親戚の結婚式に出るため新幹線新大阪駅ホームに降り立ったのだった。結婚式が終るとすぐ式場を出た私は、あらかじめ電話をかけておいた友人たちと久しぶりに会い、そして夜遅くまで飲んだ。日帰りで東京へ帰るつもりだったが、つい最終列車の時間に遅れてしまい（といっても、八時前後のまだ宵の口だが）、それから飲み時間をかせぐことになったのである。先輩格のSに連れられて三、四軒飲み廻ったあげくの時間が午前三時、予約なしではホテルに泊るわけにもいかず、友人の家へ行くのも気がすすまぬので、私はミナミに近い連れ込み旅館街の一軒に入って、一人で泊った。

部屋の小さな冷蔵庫からビール一本を取り出し、ピーナツを齧りながらさらに一本を取り出して、一人でハシゴ酒の最後の仕上げをしてから、酔いのなかで眠りに落ちた。翌朝、熱い風呂でサウナまがいに汗を流したが、二日酔い気味に頭蓋の裏に貼られた膜が取れない。私は十一時ごろ薄暗い旅館から、白昼の太陽が照りつけるまぶしい旅館街の路上に出た。

さて、これから東京へ直行せねばならぬが、そのまえになにかスープでもたっぷり摂って、荒れ模様の腸に湿りを与えねばならない。国電鶴橋駅までタクシーで数分だ。駅界隈の焼肉食堂街へでも行って、赤エイかマナ鰹の膾（フェ）、つまり朝鮮式刺身に、適当なスープ、ビールを一本添えて胃袋に送るのがよいだろう。いや、それよりもいっそ狗汁（ケージャン）を食べに行こうと決めた。そしてタクシーを走らせて鶴橋駅のガードをくぐり、駅からさらに東南へ十数分、O橋のあたりまでケージ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ャンを求めてやって来たのである。以前に友人に連れられて、二、三度来たことがあるところで、味に定評があってうまい。ケージャンは別名が補身蕩（ポシンタン）といわれるように、日本の土用のうなぎに似ていて、夏バテ防止用としても食べる。補陽剤（ポヤンジエ）、つまり即効的な強精食と当てこむ性急な人間もいるが、そうではない。これは漢方の処方にも似て、全身の健康を促すことで精力を増進させるものであり、速効を排する。しかし、それでもなにがしかの速効を期待する信者は少なくない。ただし、ケージャンを食べた翌朝は、たとえば鼻頭から小鼻の周りにねっとりした脂が浮き出てくるのは請け合いである。

冷房装置のない扇風機だけの小さな食堂で、大鉢に盛られた熱いかなり辛めのケージャンを、ふーっふーっと息を吹きつけながら朝鮮式スプーンで口に運び、青唐辛子のいかにも辛そうに先のねじれて尖ったやつを味噌をちょっとつけて齧る。スープで熱している舌にたちまち火がつき、目玉が飛び出さんばかりに辛い。その舌が千切れそうな辛さに耐える数秒間かは一種の激しい苦行ともいうべきだが、それは同時に断続的に切り刻むようなエクスタシーの瞬間の持続でもある。そこへ焼酎を、昼間というわけで控え目ながら、柔らかい口腔の粘膜を痺れるように刺す焼酎をふくんで咽喉へ送りこむ火のような感覚はたまらない。焼酎が咽喉を通りすぎると、かあッと息を吐く。そしてさらにスープを口に運ぶのだが、熱さと辛さの刺戟のためにしばらく具を口中にあずけたままで嚙むことができない。辛さが頭にのぼり、頭皮を剝がしたくなるくらいいちどに

むず痒くなって、それが痺れの感じといっしょになってしまう。わらびなどといっしょにとろとろに炊かれて繊維状にほぐれ肉の形態を失った茶褐色の、いろんな調味料で十分に味付けされた濃厚な液体は、口へ運ぶのがもどかしいほどにその味がこたえられない。傍で人が死んでも分からぬの喩えどおり、食べているあいだはすべての憂いを忘れるというものだ。

顔中に汗が、辛さで脂汗までがいっしょに噴き出し、ハンカチで拭いても間に合わぬ汗が背中や胸もとに流れ落ちるに委せる。開襟シャツを脱ぎ、腕時計を外す。上半身はクレープの肌着一枚になったが、それも汗でびしょ濡れだ。できることなら、夏場のこと、肌着も脱ぎ捨てて上半身素裸の汗みどろになって食べるのがよろしい。それが美味、壮快、ケージャンを食べる醍醐味なのである。いや、私の席は三つあるテーブルの一つだったが、店の奥の小さな板間では、丸い膳を囲んで坐った三人の男が素裸の上半身を汗にぎらぎら光らせながら、焼酎を酌み交しては呵呵大笑、ケージャンだけではなく、皿に盛られた肉そのものを食べていた。常連か、近所の男たちであろう。

おかげで、ケージャンを食べながらサウナにでも入った状態で私の軀からは熱が発散し、先刻までの二日酔いは完全に吹っ飛んでしまった。そして、代りに新しい酔いがそれも快い程度に軽く全身を浸していた。ケージャンの味に満足した私は、汗だくの上半身を扇風機の風にしばらく乾かしてから開襟シャツを着け、その路地裏の食堂を出てきたのである。

私は広いバス道路を北へ、今里のほうへ向ってしばらく歩いた。またぞろ汗がにじみ出てくる。手に小さな革カバンをぶら提げた私は、右手のハンカチで首筋の汗を拭きながら歩いて行った。食堂へ来るときはともかくとして、ケージャンを食べ終えた途端にタクシーを拾うのはいささか呆気ない感じがする。かつて同じ生野区内のここからあまり離れていない今里寄りの猪飼野に住んでいた私には馴染みのあるところであって、さっさと素通りしてしまう気にはなれない。まあ、お愛想にでももうちょっと歩こう。朝鮮服の女が大股で道を行き、半袖のワンピースを着けて日傘をさした老婆も、歩き方からそれとなく朝鮮の婆さんだと分かる。町並みは新築の家が多くなってかなり変った感じだったが、コンクリートの巨大な高速道路が走っているわけでもなく、昔の町の姿は整備された道路にもそのまま残っていた。急速に変貌を重ねて行く中心地とは違った下町らしい平凡なたたずまいである。

昼間の焼酎の一合はいささか効き目があって、燃え残りのアルコール分が体内でまだ熱を生産しているらしく、いまだに顔の火照りが収らない。私は顔の汗を拭きながらこの辺でタクシーを呼ぼうかと立ち止まったとき、蟬の鳴き声を耳にした。灰色の町で、緑といえば歩道際のプラタナスの並木くらいのものだが、蟬はその大きな葉の茂みのなかで鳴いているようだった。じーいん、じーいん、じーいん、まるで耳鳴りのように内に響く複数の蟬の声で、じりじり照りつける夏の太陽の熱に負けじと懸命に鳴き続ける。金具が陽に灼けて暑そうな金物屋のまえの木蔭で、

ランニングシャツ姿の少年が二人、アイスキャンデーをしゃぶっていたが、頭上の蟬の鳴き声には馬耳東風だ。緑のない町には珍しい訪問者のはずだが、あまり関心がなさそうだった。昔だったら、どちらかが絶対におれのをしゃぶるなと指切りをして、食べさしのアイスキャンデーを相手に預けてから木にそっと登り、素手で蟬の生捕りを試みることだろう。多分に取り逃してしまうだろうが、いま樹上の蟬の鳴き声は小さな冒険へと少年を誘っていた。しかし少年は笑いながらアイスキャンデーをしゃぶり続ける。われわれの子供のころの蟬の激しい鳴き声は、どれほど刺戟に充ちたものだっただろう。必死になって、蟬をつかまえる算段をしたものだった。

まぶしい空には、入道雲が湧き上っていた。私は、捕獲される危険のない樹上の蟬と木蔭の少年たちの〝平和共存〟の情景をあとにして、タクシーに乗った。ひと夏懸命に鳴き続けて命果てる蟬を、そっとしておくのもいいことだ。冷房がひんやりと気持よかったが、汗はすぐには引かず流れ続ける。私はタクシーの窓から渦巻くように中天にせり上って白く輝く巨大な積乱雲を見つめながら、そう、きょうは八月十四日なんだとつぶやく。なにかの約束事があるわけでもなく、いま八月十四日をとくに意識する必要はないのだが、あしたが八月十五日、その八・一五を一日まえにした十四日ということなのだ。昔なら八・一五の前夜祭の日だ。

八月十五日といっても、いまは自分の意識の底を静かにくぐらせる程度のことでしかない。八・一五を口に出して人と語り合わないということだ。「八・一五解放記念日」。カレンダーの起点が

一月一日ではなく、一九四五年八月十五日に始まるような戦後の歴史の節目の重なり具合が、いまは苦渋の思いをもたらせる祖国分断の日々の積み重ねの徴しに変ってしまった。数年まえまでも八月十五日の前日か前々日になると、友人から電話がかかって、どうだ、あした会おうじゃないかと誘いをかけて来たものである。なにか用事でもあるのかと問い返すと、いいや、別に用はないが、八・一五だから一杯やろうと思ってのことなんだと電話の主はいう。相手は決して、八・一五のために乾杯を、というわけではないのだが、ともかく「八・一五解放記念日」にかこつけて一杯やろうという魂胆なのだ。もはやその情熱の湧かぬ私は、なんの八・一五なもんかね、と笑って断わる。八・一五の夜、一人で酒を飲む分には抵抗はないが、二人あるいは何人か寄り合って酒を飲み、そしてしゃべる気がしないのだ。いまはもうかなりまえのことになったが、そう、かつてはそうではなかった……。タクシーが今里ロータリーを左折、以前は市電が走っていた道路を国電鶴橋駅のほうへ向った。旧今里終点、つまり路面電車の廃止以前にそう呼ばれたターミナルの界隈の商店街の路地裏は、赤提灯が並び、安酒を飲む恰好の場所だったのである。

まだ解放後まもないころの八・一五記念の夜、大阪駅前のどぶろく屋からはじまるハシゴの果てにやって来る居酒屋もこの界隈にあった。最初からこのあたりで乾杯をする場合もあったが、西宮方面からやって来る友人もいたので、大抵は大阪駅前の行きつけのどぶろく屋の二階に集ったものだった。戦後の三、四年から十年ごろまで、毎年八月十五日の夜、在日朝鮮人の学生団体

で知り合った四、五人の親しいレギュラーメンバーが集まって、イーストで醗酵させた白い濁酒を飲み、焼酎を飲み、合成酒を飲み、ときにはビールで八・一五のためにグラスを合わせて乾杯をした。そして酔うほどにカンカンガクガク、飲み方の激しい私はときには滂沱と涙を流す。そしてやがてはハシゴをし、酔いつぶれるようなことが二十代の八・一五の夜には続いた。西宮のKと吹田のS、そして私が無欠席の常連だったが、他にも何人か入れ替りに顔を出していた連中がいた。これらのメンバーのうちでいまも消息のあるのはSと私ぐらいのものだ。Kはいつかしみじみとかつての「軍国青年」だった自分を述懐していたが、いち早く内密に北朝鮮へ帰って行ったときは熱烈なコミュニストになっていた。他のある者はすでに黄泉の客となり、ある者は消息不明だった。

大阪を離れて東京へ来てからも、八・一五の夜、あるいはその前夜には何人かで酒を酌み交したものだが、それも絶えて久しい。いまは八・一五の夜、手にする杯は苦い。苦い杯を避けるのではないが、しかしなにも好んで口にすることもないだろう。そういえば、八・一五を二日後に控えた昨夜、Sらと飲みながらだれも、八・一五を口にする者はいなかった。Sは私と同じく焼跡時代の大阪駅前のどぶろく屋の生き残りメンバーだが、歌はうたいながらも八・一五には触れなかった。まるで無視していた。八・一五は内向し、深く潜行したかのようだ。二十代だったわれわれが五十代になったいま、ともに年を取るだけで色褪せて行く〝解放〟、南北分断のクレバ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook